

ICT活用という機会の捉え方と授業の本質について

香里ヌヴェール学院高等学校 阪本 恒平

一 はじめに

全国の新型コロナウイルス感染者が増加の一途を辿っている現在（二〇二二年二月）、再びオンライン授業に転換する学校が増えている。暗いニュースではあるが、過去から学び、試行錯誤しながら前に進んできた我々にとって、今回もまた、成長することができると一つの機会として受け止めていきたい。私は評論家ではなく、実践家である。諸先輩方のような深い教養と知識が不足する私にとって、実践こそが全てである。その前提のもと、今回は私が経験したことを皆さんに共有したい。

二 ICT活用によって生じた変化

まず、生徒の変化について、これは第三十九号にて親和女子高等学校の山科先生も効果の一つとして紹介されていたが、圧倒的に生徒のアウトプットのハードルが下がった。教室で挙手をさせたり、指名をしたりして解答させる時には比べ物にならない心理的安心が生徒たちの中にはあるであろう。授業中の発問にはロイロ

ノートで回答を回収するが、ほとんどの生徒が提出をする。私の拙劣な授業手腕では、ICT活用前はこのような状況にはなかった。他にも、文章の読み取りを絵で表現したり、そこにBGMをつけてみたりと、生徒のアウトプットの幅は拡がり、そのハードルはみるみるうちに下がっていった。

変化の波は教員にも及ぶ。本校でのオンライン授業導入期に、私が、ある非常勤の先生の授業サポートに入った時のことだ。その先生はこう仰っていた。

「いやあ、今まで教師をやっていて、生徒にはとりあえず多く知識を与えておいて、それを何度も繰り返していくうちに感覚がついて何となくできるようになっていくもんだ。なんて思ってた授業をしてきたけれど、いざ久しぶりに教わる側になってみると、そんなのは全く無理。

ICT関連のこと、一気に言われても何から理解をすればいいのかさえ分らない。回復しても無理だと頭がそう言っている。身を持って感じた。これからはオンライン授業の手法につい

てはもちろん、自分の教え方も改めないといけない。」

私はこのパラダイムシフトを目の当たりにした時に自分の憑き物がとれた気がした（後述）。長年教壇に立ち、指導法や知識に矜恃や自信も十分に手に入れてきたであろう人が、オンライン授業をきっかけにそれらを見直す必要があると判断されたのだ。ICT活用が一人の教員に変革をもたらす瞬間であった。

三 水面が揺れると対話の機会が生まれる

さて、変化が起きると、必ず出てくるのが、反対・懐疑派である。ただ、反対・懐疑派と言いつつ争いをするのではなく、建設的な論争をすることが必要だ。ここで重要なのは、何を大切にすべきかということだ。

全国的にオンライン授業の可能性を模索し始めた二〇二〇年の春、国語科教員対象のオンライン授業のHOWTO講座の講師を務めさせていただいたことがある。そこで、古典文法を横書きで説明したスライドを先生方に共有した

「先生」の話している「内容」が「聞こえ」づらく、「分から」ないというものだ。これを【回線不良クラスター】と命名する。三角形のクラスターについても同様の考察ができ、「途中」「声」が「途切れる」ことで、「聞き取れ」ずに授業内容を理解できず「不安」であるという文面である。こちらを【音声不良クラスター】と命名する。

【回線不良クラスター】【音声不良クラスター】の二つのクラスターにおいて、音声が届かない・途切れることに対する不安が大きいのは、授業を聞きたい・しっかりと理解したいという気持ちの表れではないだろうか。理解しようとする姿勢があるからこそその不安である。また、六角形のクラスターは「少し」「進む」のが「早い」という授業スピードに関する生徒の不満であると考えられ、星のクラスターは授業間の「休憩」の「時間」が「長い」ということに対する指摘であると考えられる。出現度数の多いコメントではないためここには記載していないが、「授業によって分かりやすさは異なる。Zoomの画面共有では、声と画面がずれているので、先生達には、『これ』『それ』などはあまり使わないで欲しい。例えば『これをここに代入したらこうなります。』ではなく『このXに3を代入すると6になります。』などと言って欲しい。これからZoomでの授業をする上で、同じ教科の先生同士で授業を受けて、分からないところを

指摘しあって欲しい。」というものもあった。

【オンライン肯定クラスター】に加え、他のクラスターからも「授業をしっかりと理解したい」という生徒の切実な気持ち伝わってくる結果であると感じている。ICT活用をしようが何をしようが、授業の自分は授業を理解したいという生徒の声に、「分かりやすさ」で応えることである。

五 分かりやすいを提供するICT活用

分かりやすいを実現するという点ではICT活用は非常に効果的である。私が特にこだわっているのは、視認性を高めることである。直感的・感覚的なインプットに慣れているデジタルネイティブ世代に物事を伝える際には、情報を取得するのに時間をかけさせないということが重要だからだ。視認性を高めるために意識しているのが、色使いと図示だ。

例えば古典の接続の説明は風船の色分けによって生徒に右脳で捉えてもらう。スライドの風船は連用形接続なので、赤色に統一している。未然形は青だ。また、フォントについても適宜使い分けることで自然と情報のカテゴリ分けができるようにしている。明朝体やゴシック体は避け、一日に受け取る膨大な情報量の中でいかに差別化して記憶に残るものを作成するかが大切だ。

完了の助動詞「ぬ」

下に推量の助動詞(む・べし)がセットになっている!
→なむ/ぬべしのカタチ

意味: ①完了 ~た/~てしまった。
②強意 きっと~/必ず~。

用 風立ちぬ。(いざ生きめやも)

→風が吹いた。

用 風吹きなむ。推量の助動詞「む」

→きっと風が吹くだろう。

warning

係助詞「なむ」と混同しない!
①文末を連体形に変えている!
②訳さなくても大丈夫!
この2点にあてはまるものは係助詞!

ぬ	基本
な	未然
に	連用
ぬ	終止
ぬる	連体
ぬれ	已然
ぬ	命令

スライド例 連用形の風船は赤色に統一

本校生徒は思考の道筋を立てることを苦手としていることが多い。そのような生徒たちに対して、アニメーションで視覚的に目を向ける場所を示すことができるというのも利点である。生徒は授業を見てくれているが、注視させることは難しく、ただ、ぼんやりと見ているということも多い。そんな時に画面に動きを出すことができるアニメーションは有効である。先ほどのスライドも、助動詞の接続を示す矢印が、

対象の助動詞を起点に、直前の言葉に刺さるようにアニメーションで動く。接続の概念が言葉で理解しにくい生徒にとっては、こういう動きで示す方が理解が進む。当たり前のことも知れないが、こういう小さな配慮をいかにふんだんに盛り込むかがICT活用の授業における「分かりやすさ」を左右するのだ。四年前までパワーポイントもほとんど触ったことがなかったが、使い始めてしまえば意外と苦にはならなかった。何より、これを個人のものにせず学校の共有フォルダに入れておけば、他の先生方が勝手により良くしてくれるのも私にとっては非常に魅力的だ。アナログ時代にはなかった、0→1の時期だからこそその醍醐味だと言える。

また、学びを受け取るタイミングを生徒が選べることも「分かりやすい」につながる重要な要素である。授業を動画で記録し、スライドと共に生徒がいつでもアクセスできるようにしておけば、単に「後で見ることができるところから便利」だけでなく、生徒が学習に前向きになった瞬間を逃さずに済むという点で非常に価値がある。動画による授業の再提供を始めてから、生徒の質問の質が格段に上がった。これまでは「分からないです」「どこが?」「ぜんぶ」のようなやり取りだったが、「この動画のここです」という意味が分からないです」とピンポイント化するようになり、試験前に集中していた質問が、授業数日後〜一週間後の週明けにも散見

されるようになった。授業という決められた枠で学習を享受していた生徒はいつも不利な状況にいたのではないかと痛感する。学習に対する姿勢の変化からも、ICT活用によって「分かりやすさ」が向上したことがうかがえる。ここでも「授業を録画して送ると、授業中に寝る生徒が増えるのでは」などのご指摘を受けることがあるが、リアルタイムの授業にしか提示しない情報を織り交ぜたりすることも可能であるし、何より授業の持つダイナミズムだけは動画では再現できない。どれだけICT活用が進んでも、そこは変わらないはずである。とは言え、そうこうしているうちにYouTubeに授業を奪われる日が来るかもしれない。そうならないためにも、むしろそうなったとしても今生徒にとって何が大切かを常に考え続ける授業者でありたい。

六 終わりに

結局、どれだけ時代や環境、教具が変わっても、「分かりやすい授業」の提供が我々の使命であるのだ。そして今、時代の転換期というならば、対話を生み出すためのICT活用という観点でこの機会を捉えるのはどうだろうか。

散々偉そうなことを述べてきたが、ICT機器やオンライン授業の導入期の私は随分高慢な存在であった。ICT推進校の割に実践が少ない現場に辟易としていたし、拳句の果てにICT研修で作った資料を「説明されても分からない

から全部写真付きで分かりやすくしてくれ」と言われ、憤慨していた時があった。

その後、前述したように、ご自身の教育観や手法を振り返る機会として学びを深めようとする先生にも出会い、人に何かを教える伝ええるということは、やっていない誰かを蹴落としたり詰めたりするための材料探しのためではなかったと気づき、大変に反省した。自分が得た知識の使い方として間違っていたのだ。あの時の憑き物が未だ健在であったならば、私にこのような原稿を執筆する機会も巡ってこなかっただろう。

皆が同じスタートラインに立ち、それぞれが大切にすべきだと思うものを認め合いながら変化に適応していく。そのために「変化を起こす側」に必要なのは、相手に引け目を感じさせないことだ。先ほどのような傲慢な態度の私はもつての他である。もつと同じ目線に立ち、知らないことを恥ずかしいと思わせないこと。相手が生徒だろうと、教員だろうと、気をつけることは同じで、最後にはその相手から多くを学ぶことになるのだ。